

長崎に最初に来たオランダ婦人

René P.Bersma

プロフィール
オランダ・ロッテルダム生まれ。1959年、家族とともにカナダ・モントリオールに移り、同国ロヨール・カレッジ、カールトン大学で古典語学を学ぶ。卒業後、カナダ国籍を取得し同国外交官として東南アジア・南アメリカ・ヨーロッパ諸国に赴任。1995年退官。ベルギー・ビリュッセル在住。

今や観光地として人気を集める長崎。グラバー邸を始め、すぐれた美術館や博物館の数々、それにもろろん出島、原爆の碑、そして大浦天主堂、いづれも少なからぬ日本人を含む大勢の探求心にあふれた観光客を集めている。

数ある日本の街の中でも西洋や中国との長い国際交流の歴史からいって、長崎は本当にユニークな存在といえるでしょう。千六百三十年代、將軍家光による鎖国が施行された当時、きびしい制約があったにせよ長崎だけが外の世界に対して開かれていたのです。

オランダ人は二百年余にわたって人工の小島である出島での交易を許されました。この時期に出島を訪れた中にはツンベルク、シーボルト、ドゥーフ、ブロムホフなど錚々たる顔ぶれがいます。彼らは蘭学の発達に貢献し、日本でも広く知られた存在です。けれども今日、こうした人々の中で、最も際だっているのが一人の女性・ブロムホフ商館長の妻 ティツィア・ベルフスマなのです。長崎に住む人なら、其のほとんどが何ものとは知らずに彼女の姿を見知っているはずで



古賀人形 (長崎純心大学博物館蔵)

それは、大浦天主堂からグラバー邸にいたるまで、土産物屋という土産物屋で彼女の肖像をあしらった商品を買っていないところはほとんどありません。もちろん出島でも同じです。日傘を手に帽子を被り、ネックレスをつけたおなじみの姿です。こうした有田焼の多くは長崎県北部の波佐見で製作されています。有田の南、ほんの十キロほどのところでは波佐見近辺の窯で現在生

産されている約一五〇種類の品々は、主として神戸、横浜、さらには福岡に近い太宰府などの国内観光地で売られています。また、古賀の中里では「紅毛夫人」または「薔薇を持つ西洋婦人像」として知られている有名な古賀人形では、七代にわたる人形作りの手で作られて現在にいたっています。これまでに作られた人形の数は数万体にのぼるそうです。この婦人像は大浦天主堂に近いオランダ茶屋でいまだに使われているものなど、数種類の暖簾にも登場しています。つい三年ほど前にも長崎のある有名なカステラ屋のロゴにティツィアが使われていました。

この女性は何もので、なぜいまだに現代日本で人気を集めているのでしょうか。また、彼女が故国オランダでは知られていないのはなぜなのでしょう。これはすべて感じ方の問題です。西洋諸国による世界進出の時代にはオランダ人の女性が夫と海外に同行し、永住したり、長期にわたって定住したりするのはごくあたり前のことでした。西洋の慣習では、家庭があつてこそ健全で安定した暮らしがはぐくまれると考えられていたからです。したがってオランダ人にとつてはティツィアが夫とともに日本へ赴いたのはとくに変わったことでも何でもありません。ところが日本の幕府が入国を許可したのは貿易に関わる人間に限られていました。女性は貿易商人とは見なされなかったところから、女性の存在は禁じられていたのです。ほぼ二世紀の長きにわたって日本にきたのは男性だけ、そこへ一八一七年の八月に、突如、何の前触れもなく、ティツィアが小さな息子と乳母、さらには下働きの女中まで連れて現れたわけですから、日本の役人たちはパニックにおちいったわけ

です。地元の関係者による暗黙の承認の手紙が將軍宛てに書かれましたが、松平定信の一派が江戸を牛耳るなかで時代の気分は外国人に好意的ではありませんでした。幕府は前例を作ることを肯んじなかったのです。そ

風信

○先日「春一番が吹きましたよ」との便りがあつた。寒い冬も終り露の臺も美味しく食いた。

○三月といえば彼岸である。彼岸とは梵語(古代インド語) Parimam "Pramamを中国佛教で彼岸と訳している。意味は中村元先生の佛教語辞典には「川向こうの岸」と記されていた。更に加えて「さとりの世界をいう」と追記してあつた。

○我が国では春分、秋分の日を中心に前後三日の七日間を佛道修行の日と定め「到彼岸会」(Parinirva)と言い寺にお参りした。この行事はインドにも中国にもない佛教行事で我が国では聖徳太子の頃より始まつたといふ。

○春分、秋分の日を彼岸の中日といい、この日聖徳太子建立の四天王寺東門より西日を拝すれば極楽が見えたとする。又我が国で最も西方にある長崎半島脇岬の観音寺山門より「お彼岸の中日、夕日を拝すれば極楽浄土が見える」と鎌倉時代の「砂石集」には記してある。

○平成四年九月三日、みろくや前社長山下泰一郎氏より「食の文化史講座」を依頼されて以来、社長は毎年何回かず「食の文化講座」を一般に公開されてきたが今年の春で八十五回となつたとの事。今年は三月十九日午後七時より長崎市民会館アマランスで開催することになつたので、私に「長崎食の文化論のしめくり」を主題にして話して下さいと言われ

る。参加費は無料の由ご自由にお出かけ下さい。○先年来NHK文化センター長崎支社主催の「史跡と美を巡る旅」に協力し案内役をお引受けしてきたが、大変好評で、今年も三月より五月まで次のプログラムで開催することになつたので良呂敷との事。三月二十九日は久留米の重文指定の高良神社を出発点に梅林寺、水天神など。四月十九日は重文指定風浪神社本殿五重塔(大川市)を出発点に柳川の御花、田中吉政公墓など。五月十一日には波佐見町の国指定史跡窯跡を出発点に東前寺、金屋神社など。参加希望者は(〇九五)八一八七〇二一のNHK文化センター長崎支社までご連絡下さいとの事。

○長崎九條会より昨年に引き続き今年も五月四日、子ども達を中心に「長崎の史跡を訪ね」ましようと言われる。私は西郷隆盛も歩いたと言う「長崎茂木・薩摩街道」を歩きましようと言案した。

の結果、ティツィアと同行の女性たち、幼い息子はフラウエ・アガタ号に即刻乗船し出国するようにと命じられましたが、ティツィアの夫と息子のヨハネスは体調万全とはいかない状態で日本に到着し、ティツィアの看護を受けて健康を取り戻す必要があると、申し立てたのです。結局十二月初旬の出帆までの三ヶ月半の間、巨匠石崎融思とその門下で出島を活動拠点としていた川原慶賀などの画家たちは、数々のティツィア像を描きました。彼女の肖像として約五百枚の絵画と版画が制作されたものと思われま

す。ティツィアの姿には長崎のアーティストたちの創作意欲をこれまでになくかきたてるものがあつたのでしよう。長崎、神戸、東京、さらにはオランダのライデン美術館などに数々の作品が現存しています。大勢の方のご好意によつてその多くを目にすることができ、感謝の念に堪えません。

私が日本という国に興味を惹かれる背景には日本生まれの妻との四十年にも及ぶ結婚生活があり、ティツィアに惹かれる背景には、彼女との血縁関係があると分かつたせいでもあります。またティツィアはやさしく教養豊かな女性で、すぐれた品格の持ち主でもあり、ピアノをひき、バイオリンもたしなんだよう

です。同時にティツィアは日本における西洋女性のイメージを象徴する存在となり、それは今も変わりません。残念ながらティツィアは強制退去という形で日本を去りました。夫を残して日本を去らなくてはならなかつた心の傷はティツィアを苦しめ続け、一八二一年四月、ティツィアは二度と再び夫と会うことなくこの世を去っています。ティツィアの存在を歴史の中で正しく位置づけたい、そう願つて私は本を書くことにしました。結局のところ、歴史にその存在を刻まれる女性のごくごくわずかなのです

が。この本の英語版、日本語版、オランダ語版の出版を経て、このたびオランダで記録映画が製作され、ティツィアの名を高めることになりました。今後、映画の日本語版も製作が予定されています。ティツィアは日本にきた時期が悪かつたのだ、という人もいるでしょう。状況が悪かつた、だから忘れ去られてしまつたのだ、と。けれども一八一七年から今日にいたるまでティツィアが芸術家たちの創作意欲をかき立て、その不屈の魂と勇気が周囲の人たちの胸に刻まれたという事実は変わりません。いま私はこのティツィアの物語がさらに多くの人々に知っていただけたらと願っています。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二一 一五四〇
十八銀行公会堂前出張所二F

